

前語基‘微’をもつ熟語に関する 日中語彙の対照研究（その1）

— 清末以前の中国文献に例証がある同形同義語を中心に —

关于由前语素‘微’所构成的中日词汇的对比研究（之一）

— 以持有中国清末以前例证的同形同义词为主 —

俞 鳴 蒙
Mingmeng Yu

『日本国語大辞典 第二版』の133個“微”词语中，约有61个日中同形同义词持有中国清末以前的例证。经查证和研究发现，日语里收为词的，在汉语里根据词典收入状况可分为：国语型、外语型、中间型和未收型4种。“外语型”的，均为清末民初的西学翻译词语，它们在汉语里大多是随着西学东渐的展开而慢慢地被收入于中英词典或专业用语词典而非汉语词典；而它们在日语里则大凡在西学资料传入日本不久后便被收入日语词典。再如“未收型”的，它们与日语不同，未收入任何词典。这些现象主要缘于日中语言的词汇体系的不同，以及日中言语对和“短语”的认定差异。另外，经文献考察发现，‘微震’、‘微罪’和‘微虫’等词的日中互动交流较为紧密，日本的「微震」「微罪」对近现代汉语的影响颇大。

キーワード：辞書収録，「語」（“詞”），「句」（“短语”）

1 はじめに

日中同形語は日中両国の長い文化交流の歴史の中で形成された同じ漢字を用いた語彙であるが、日中語彙の交渉・交流がもたらした特有な文化現象であり、日中語彙の対照研究における大きな焦点の一つである。ところで、前語基‘微’（以下、「」で日本語を、“ ”で中国語を、’ ’で日本語と中国語に一括して言及するのを示す）をもつ日中同形語に関する対照研究はまだ少なく、調査が必要であると思われる。そこで本稿ではその基礎的な調査を行うことにした。

本調査は、『日本国語大辞典 第二版』（小学館、2000-2002、以下『日国2』と略称する）に収録されている語に基づいて考察する。それは『日国2』が国語辞典的項目だけでなく、百科事典的項目も幅広く収録しており、前語基‘微’をもつ日中同形語を概観するのによいからである。『日国2』には前語基「微」をもつ語が146語収録されている。それらを対象に日中語彙の交渉・交流の観点から、①意味の異同、②典拠と用例、③影響関係を中心に調査・考察を行う。

なお、中国語については、先行の研究論文や著書、中国国内で出版された国語辞書や百科事典的項目も収録する《辞海》や中英辞書や専門用語辞典、古典籍や近現代の文献、インターネット上の学術情報データベースや新聞社の《人民网》のデータベース（例文引用の際にrmwで示す）などを利用して調査する。また、日本語についても同様である。

2 調査対象の語数と分類

2.1 本稿では同形語をやや広く考える。まず、「微測計」と“測微计”のような日中の字順が逆転したのも同形語（同源語）とする。次に、「微分商」に対して、中国で“微分商”も使われるが、“微商”が標準だという場合のように、一部が省略されたのも同形語（同源語）とする。さらに、“微粉炭”¹⁾のような中国の民国期に限り使われ、現在では廃用されているものも同形語とする。このように同形語を考え、『日国2』の146語を中国語と照合すると、日中同形語は133語（約91%）、そうでないものは13語（約9%）となる。

微家²⁾ 微牛 微苦笑 微細画 微視的 微視的分析 微弱柔軟 微事郎 微分可能
微分不可能 微粒子現象 微粒子病原体³⁾ 微量養素・微量要素

上記の13語の大半は和製漢語や日本語的複合語であるが、「微事郎」だけは異なっている。呂宗力監修《中国历代官制大辞典》(1994)に、

征事郎 ①官名。隋炀帝大业三年(607)置,員五十人,正八品,隶谒者台,据事大小出使。
②唐朝置为正八品下文散官。…(p. 527)

とある。“征事郎”は繁体字で書くと“徵事郎”であり、‘微’と‘徵’が紛らわしい文字であるため、「微事郎」は古筆の誤りによるものと考えられ、本来は前語基「微」をもつ語ではないことを指摘しておきたい⁴⁾。

2.2 133語の日中同形語の例証（初出例）を文献資料に求め、それを次のような基準で分類する。まず例証が確認できる年代に基づいて大別し、清末・明治以前のものをⅠ、清末・明治以後のものをⅡとする。Ⅱに関しては、中国の文献や在華宣教師による洋学資料に典拠や例証があるものを①、日本の文献に例証があるものを②とする。次に、日中両語の意味に基づいて区別し、同形同義語をA、同形異義語をBとする。そして、特にAについては、中国で出版された辞書に収録されているかどうかに基づいてさらに区別し、収録されているものをa、収録されていないものをbとする。（b種類のものの上に*を付けて明記する。）

Ⅰ 清末・明治以前の文献に例証があるもの

A-a: 中国で出版された辞書に収録されている同形同義語。

A-b: 中国で出版された辞書に収録されていない同形同義語。

B : 中国で出版された辞書に収録されている同形異義語。

Ⅱ 清末・明治以降の文献に例証があるもの

①中国の文献に例証があるもの

（A、B以下はIに準ずる。）

②日本の文献に例証があるもの

現時点で調査対象の133語は、表1のように分類できると考える。なお、例証の年代が確定的でないものが若干あるが、詳細はその都度触れる。以下、I類の中のA-a（46語）とA-b（15語）を中心に検討し、その他については別稿に譲ることとする。

表1

I 清末・ 明治以前	A-a 微音-微音 微飲-微飲 微雲-微雲 微瑕-微瑕 微官-微官 微寒-微寒 微義-微義 微軀-微軀 微醺-微醺 微月-微月 微顯闡幽-微显阐幽 微功-微功 微光-微光 微香-微香 微黄-微黄 微紅色-微红色 微才-微才 微罪-微罪 微霰-微霰 微志-微志 微疾-微疾 微邪-微邪 微弱-微弱 微小-微小 微笑-微笑 微傷-微傷 微臣-微臣 微身-微身 微晒-微晒 微震-微震 微醉-微醉 微睡-微睡 微誠-微誠 微雪-微雪 微節-微节 微賤-微贱 微顫-微颤 微増-微増 微衷-微衷 微熱-微热 微服-微服 微俸-微俸 微命-微命 微利-微利 微力-微力 微涼-微涼 計46語
	A-b 微運-微运 微勳-微勋 微芸-微艺 微見-微见 微減-微減 微紅-微紅 微細行天-微细行天 微臭-微臭 微心-微心 微進-微进 微善-微善 微促-微促 微忠-微忠 微虫-微虫 微服潜行-微服潜行 計15語
	B 微陰-微阴 微温-微温 微温的-微温的 微管-微管 微響-微响 微言-微言 微行-微行 微細-微细 微子-微子 微旨-微旨 微詞-微词 微質-微质 微霜-微霜 ほか 計33語
II 清末・明治以後 微氣候-微气候 微氣象-微气象(学) 微係数-微(分)系数 微古生物学-微(体)古生物学 微罪処分-微罪处分 微罪不起訴-微罪不起诉 微小管-微小管 ほか 計39語	

3 中国で出版された辞書に収録され、清末以前の文献に例証があるもの

3.1 中国で出版された辞書に収録され、清末以前の文献に例証があるもの（表1のI A-a）を検討してみると、その特徴として、中英辞書にしか収録されていない語があることが挙げられる。それらには典拠が示されていないが、文献に例証は存在している。それでなぜ国語辞書に収録されていないのか。それは“微”の文法的働きに起因すると考えられる。“微”は連体修飾語（定語）、連用修飾語（状語）として、“微+名詞”、“微+形容詞”、“微+動詞”といった組み合わせで自由に使うことができる。例えば、明の医師の李時珍が著した《本草綱目》において、“微+形容詞”だけについても、

微寒、微温、微涼、微暖、微冷、微毒、微黄、微黄色、微紅、微紅色、微赤、微紫、微紫色、微青、微青黒、微青黄色、微黒、微黑色、微白、微白色、微褐、微褐色、微碧、微灰

色、微苦、微辛、微涩、微甘、微咸、微酸、微酢、微香、微臭、微腥、微芒(光る)、微光、微大、微小、微粗、微細、微窄、微狭、微闊(幅広い)、微長、微短、微方(四角い)、微圓、微扁(平たい)、微薄、微深、微淡、微軟、微硬、微韌、微壯(頑丈)、微弱、微尖(尖る)、微彎(曲がる)、微曲、微朽、微濕、微熱、微痛、微疼、微麻(痺れる)、微痒、微煩(苛立つ)、微難、微瑣(煩瑣)、微賤 …

のような例が見られる。このように、中国語では“微”は性質を表す形容詞と自由に組み合わせることができる。そのために、それらのうちで熟語としてもよいものでも、国語辞書に収録されない場合が多い。つまり中国では従来それらを「語」(“词”)ではなく、「句」(“短语”)として認識していたと言えよう。しかし、近代の西洋文化の導入に伴って、英中辞書の中で使われる訳語の一部が徐々に「語」(“词”)として中英辞書に収録されるようになったのである。

したがって、中国で出版された辞書に収録され、清末以前の文献に例証がある日中同形語同義は、辞書の性格に基づいて三つに区別し、①国語辞書に収録されているものを「国語型」、②中英辞書にだけ収録されているものを「外語型」、③《中文大辞典》(1966)や漢方医学などの特殊な辞書にだけ収録されているものを「中間型」とする。

3.2 以下、「外語型」の語を五十音順に検討する。なお、下記のダッシュ「—」の後に例証を挙げるが、それが初出例かどうかについては検討の余地があることを断わっておきたい。

3.2.1 ◆微紅色 - 微红色 — 《本草綱目》(明・李時珍1518-1593) ○按胡仔《漁隱叢話》云：…微新安黃山是朱砂泉，春時水即微紅色，可煮茗。…(<http://www.621m.cn/cms/>の電子版, p.266)

“微紅色”は中国の国語辞書には収録されていないが、常用されている。文献例証は明のものが早いようであるが、初出例かどうかは確定できない。現在は中英字書にしか収録されていない。

漢英大辞典(1999)○微红色 blush

3.2.2 ◆微傷 - 微伤 — 《北史・卷二十三列傳第十一》○又使人微傷其牛，任氏嗟惋，杜氏自若。(《漢典古籍》. <http://gjzdic.net/>, 以下hdgjと略称。)

《漢語大詞典》には“微傷”の見出し語はないものの、他の語のために挙げられた用例の中に“微傷”が数例使われている。それは間接的に“微傷”の用例にもなっている。その一つは上記に挙げた唐の李大師・李延寿による《北史》の用例である。

○(雜錄)驗各種器械微傷之法(《大陸》10号, 1904.2, p.12)

○不多久，車里边的人叫了社会上的一些小混混过来，并对该保安拳打脚踢，经医院检查属微傷，警方赶到时已找不到肇事人。(rmw. 2005.3.7)

上記の近現代の用例が示すように、“微傷”の用例はどの時代の文献にも見られる。しかし、“微傷”は中英辞書にのみ収録されている。

最新漢英大辞典(1956)○微傷 A slight injury(p.445)

新漢英医学辞典(2003) ○微傷 *microtrauma, scratch*(p.716)

清末に遡れば、“微傷”は当時の英華字書で訳語として使われている。

英華字典(1868) ○*Scratch, a slight wound*, 微傷(p.1551) ○*a slight injury*, 微傷(p.1617) ○*slightly wounded*, 微傷(p.1617)

華英字典集成(1887) ○*a light wound* 微傷(p.196) ○*a slight wound* 微傷(p.340) ○*slightly wounded* 微傷(p.340) ○*to wound slightly* 微傷(p.451)

以上のことから、“微傷”は古代から常用の「句」(“短语”)であるため、在華宣教師たちによって「scratch」などの訳語として使われ始めてからも、従来通り「句」(“短语”)のままだったのである。そして、後に専門用語の訳語として使われ徐々に「語」(“词”)として認められ、中英辞書及び専門用語辞典に収録されるようになったと思われる。

漢英大辞典(1920) ○微傷 *A slight injury*(p.287)

日本語の「微傷」に関しては、『近代デジタルライブラリー』によって、『日国2』の「微傷」の初出例(1883~8)より早い用例が指摘できる。

○此役に三好少将^{まさ}微傷^{びしやう}を負ひ…(『西南戦争記事』1877, p.45)

次の例は津田仙・柳沢信大・大井鎌吉が共訳した『英華和訳字典』(1879)の中に見られるが、周知のように、『英華和訳字典』はロープシャイド(W.Lobscheid)の《英華字典》を原著にし、若干改訂した和刻本である。「微傷」に関しては、原著に記載された3例のうち「Slight, … a slight injury, 微傷」が略され、次の2例が訳されている。

英華和訳字典(1879) ○*a slight wound*, 微傷, 浅傷, …アサキツ, カキコハシ (p.1008)

○*slightly wounded*, 微傷, ワヅカニイタメタル (p.1078)

また、沈(1999)によると、幕末の日本にも伝来した《六合叢談》に“微傷”の用例がある。

○二人皆躓、而神父為所獲、主教受微傷、(《六合叢談》1857-1858, 1巻4号, p.14a)

その他、「微傷」は、明治期の多くの辞書に収録されている。例えば、高橋五郎編『漢英対照いろは辞典』(1888)、高橋五郎編『和漢雅俗いろは辞典』(1888-89)、山田美妙編『日本大辞典』(1892-1893)、藤井乙男・草野清明編『帝国大辞典』(1896)、林甕臣・棚橋一郎編『日本新辞林』(1897)、落合直文編『ことばの泉』(1898-1999)などが挙げられる。

漢英対照いろは辞典(1888) ○びしやう 微傷, あさで, 輕傷, うすで *A slight wound*. (p.1108)

和漢雅俗いろは辞典(1888~89) ○びしやう 微傷, あさで, 輕傷, うすで (p.1191)

帝国大辞典(1896) ○びしやう 名詞(微傷) あさでにおなじ。(p.1203)

そして大正期の松井簡治・上田萬年編『大日本國語辞典』(1915-1919)に収録され、『日国2』に至っている。

大日本國語辞典(1919) ○びしやう 微傷 輕微なる負傷。いささかのきず。かすりきず。あさで。うすで。輕傷。(p.457)

在華宣教師による英華辞書や洋学資料にある「微傷」は、当時の日本では英訳の借用語と新

語の性格を有するため、辞書の見出し語として採録されるようになったと思われる。

以上から分かるように、清末・明治以後における、「微傷」に関する日中両国の辞書の扱いは対照的である。日本では新語として国語辞書に収録されたが、中国では“微傷”は新語ではないので、国語辞書には収録されず、現在は「外語型」の語となっている。

3.2.3 ◆微震 - 微震 — 《沁园春》宋・崔中 ○默地雷微震，冲开玉户，天心朗彻，放下帘帟。《诗词名句网》<http://www.shicimingju.com/baidu/>，以下 shici mingju を略称)

まず日本の「微震」について検討しておく。「微震」は前述の《英華字典》(1868)などの英華・華英辞典には見当たらない。『ヨミダス歴史館』によれば、『日国2』の1907年と1908年の用例より早い、下記の1884年の『読売新聞』に掲載された「地震報告」という記事の用例（後ろに ymur をつけるもの）を指摘できる。

○其うち地震を感ぜる最も強き地ハ往々品物を顛倒し又ハ壁土を振ひたる等の事ありしも其の弱震の部分ハ震力弱くして前の如き異事なく唯だ人々が明かに地震を感ぜし迄なり又其微震の部分ハ最も震力微にして中には是を感ぜざる地もあり由 (ymur. 朝刊 1884.12.5, p.3)

『日国2』の意味②の説明に、「地震の強さを表わす等級の一つ。気象庁旧震度階の第一階級。」とあるが、ウィキペディアなどの説明によれば、「微震」は、世界初の地震を専門とする教授の関谷清景が1884年（明治17）に取りまとめた『地震報告心得』の日本最初の震度階級と関係する言葉であり、当初「微震」、「弱震」、「強震」、「烈震」の4段階であったという。上記の『読売新聞』の記事の中で、1884年10月15日の地震が報道され、それに関連して「強震」、「弱震」、「微震」の用語についても丁寧に説明されているところを見れば、「微震」などの用語は確かに当時においてはまだ新しい用語であったように思われる。

「微震」は関谷清景が初めて使ったかどうかは定かではないが、後に動物から地文まで8学科の用語を収録した中等教育用の郁文舎編輯所編『理科辞典』（1904）に収録され、山田美妙編『大辞典』（1912）にも収録されている。

理科辞典（1904）○（地震の強さ）…静止せる人若しくは注意せる人にして始めて感ずる輕微の震動を微震と云ひ、何人も感じ得べき地震して、戸障子爲に鳴り、垂下物の動揺液體の震蕩を起こすべきものを弱震と云ふ、震動これより一層甚しくして舊き建築物を破損し牆壁に龜裂を生じ、石燈を倒し、振子時計を停め、瓶水を溢出せしむるものを強震と稱し、其の震動最も激烈にして家屋を轉倒し、山嶽崩壊し、地盤に大變動を生ぜしむるに至るものを烈震と名づく、… (p.419-p.420)

そして大正期の『大日本國語辞典』（1915-1919）に収録されたようである。

大日本國語辞典（1915-1919）○びしん微震 ㊦かすかにふるふこと。微小の震動。㊧
【地】静止せる人、又は注意せる人にして、始めて感ずるほどの地震。(p.463)

なお、1996年に震度に関する「微震」など等の用語はすべて廃止されたという⁵⁾が、「微震」

は明治期から気象用語として普及した語である。

一方、中国の民国期に王應偉(1917)の翻訳である“地震之震度及震源距離(附圖)”に、

地震學家洛希福來耳(Rassi Forel)所分之震度階。約為十種。即地震之強弱。由一至十諸數表示之。(其詳具載民國四年七月份氣象月刊)為現時西洋所通用,而日本中央氣象臺所定之震度階。則分為次數種。

(1) 無感覺地震。

(2) 微震。……(以下略)(《觀象叢報》10, 1917.2, p. 41)

とあり、日本の「震度階級」が紹介されている。また、西洋の震度階級についても紹介されている。それは地震学者ロッシ・フォレル(Rassi Forel)が区分した約10段階の震度階級であり、日本の震度用語と異なりそれぞれ数字で表される。ところで、民国期の中国で《觀象叢報》に掲載された“七年二月十三日地震各地調査表”によれば、震度(烈度)は数字で表されていたようである。

省名	縣名	東經	北緯	烈度	方向	時間(時分)
廣東	蕉嶺	116.6'	24.°34	7	東	13.35 (12號, 1918.3, p. 49)

したがって、中国の文献中の“微震”は上記の宋の用例を含めて、「かすかな震動、微小の震え」の意味で使われていると言えよう。類例を挙げておく。

○二十五日戌刻地微震《春融堂雜記八種・滇行日錄》1808, p. 26)

○廈港微震 廈門二十二日後二時五十五分, 地微震, 歷一分三十秒止, 門窗簌動, 無損失。…(《氣象雜誌》9, 1936.12, p. 533)

○三峡水库也是如此, 蓄水一年监测到可定位的微震次数为717次, 震感不强, 最大震级为里氏2.5级, 迄今没有发现破坏性的地震。(rmw. 2004.7.13)

このように、現在に至るまで使われている“微震”が、中国で出版された国語辞書に収録されていない理由は、それが“微傷”と同様に「句」(“短语”)とされていることと、震度用語に使われていなかったことによるのであろう。ただ、後には、専門用語辞典や英中辞書の中で訳語として使われたので、「語」(“词”)として中英辞書に収録されたように思われる。

新編華英工學字彙(1915) ○microseism微震

英華辞典(修订縮印本1957) ○microseism微震 (p. 796)

中英辞典(1979) ○微震 ① slight shock ② microseism(p. 714)

以上から分かるように、日本語の「微震」は借用語であるが、1884から1996年まで震度階級を示す用語として使われていた。それに対し、中国語の“微震”は「句」(“短语”)として使われ、国語辞書には収録されないが、地震に関する用語の訳語として使われるにつれ、中英辞書には収録されるようになったのである。

3.2.4 ◆微睡-微睡—《富阳道中》宋·姚勉 ○曝背翁微睡, 挑包僧自行。(shici mingju)

“微睡”については宋の文献に用例があり、現在も使われている。しかし、中英辞書にしか収

録されていない。

○从每一跟脚趾开始，一点一点放松全身每一个器官，似睡微睡中放下了一天的烦恼与疲劳。(rmw. 2003.7.18)

英汉双向医学词典(2002) ○微睡 slumber (p.716)

“微伤”と同様に“微睡”も中英辞書との関わりでは清末に遡ることができる。

英華字典(1869) ○Slumber, to sleep slightly, …微睡; (p.1619)

華英字典集成(1887) ○Doze, to 發睡魔, 疲憊, 微睡(p.112)

○Slumber, to 睡, 微睡(p.341)

漢英大辞典(1920) ○微睡 slumber; drowse(p.287)

要するに、“微睡”も“微傷”や“微震”と同様に、一方では「句」(“短语”)として見られるので国語辞書に収録されておらず、一方では外国語及び科学用語の訳語として後に中英辞書に収録されるようになったのであろう。

日本語の「微睡」の『日国2』での初出例は1886年のものである。しかし、管見では「微睡」は「微傷」と同様に、まずロープシャイドの《英華字典》を改訂した和刻本の『英華和訳字典』に見られ、その後『和漢雅俗いろは辞典』、『漢英対照いろは辞典』と山田美妙編『大辞典』(1912)に、そして『大日本国語辞典』に収録されたようである。

英華和訳字典(1879) ○ Slumber, v.i. to sleep slightly, …微睡, マドロム, ネムル, (p.1082)

漢英対照いろは辞典(1888) ○びすい(する) 微睡, まどろむ, とろとろする To doze, to nap. (p.1110)

和漢雅俗いろは辞典(1888~89) ○びすい[する] 微睡, まどろむ, とろとろする (p.1194)

大辞典(1912) ○びすい ㊦ ウタタネ。(p.4041)

大日本国語辞典(1915-1919) ○びすみ 微睡 少しねむること。まどろむこと。うたたね。(p.464)

日本語の「微睡」は「微傷」と同様に、洋学の導入に伴い、借用語の英訳語がそのまま新語として使われ、国語辞書にも収録されるようになったと推測できよう。次の用例は新聞記事のものである。

○「人體感應述」…被感者の被感度に於て…第一は微睡期夫より進んで第六を熟睡期とし(『朝日新聞』〈以下ashを略称〉東京朝刊1907.11.30, p.6)

3.2.5 ◆微増 - 微増—《隋書・律历下》(656) ○日之与月, 体同势等, 校其食分, 月尽为多, 容或形差, 微増亏数, 疏而不漏, 纲要克举。(hdgi)

“微増”も国語辞書には収録されていないが、現在は中英辞典に収録されている。

○國際經濟：蘇俄今年之工業微増(《銀行月刊》7, 1928.8, p.494)

○到2005年, 国际旅客将达6.37亿人次, 今年全球客运量比去年微増0.9%, …(rmw. 2002.6.2)

英汉双向商贸词典(2002) ○微增 slight increase (p.954)

日本語の「微増」は『日国』の第1版から収録されているが、用例が挙げられていない。今回の調査では1930年代の新聞記事にある用例を採集することができた。

○十二月中綿糸生産微増 (ymur. 夕刊1932.1.9, p.4)

○世界繁船微増 (ash. 東京朝刊1937.10.12, p.4)

また、「微増」と関連する「微減」も1935年頃のものだ(4.2.3で後述)という点から推測すると、日本の昭和前期に中国語から借用して使われ始めたのではないかと思われる。

「外語型」の中では、「微増」は、前述の“微震”と同じく、清末の英華・華英辞典にはないようなので、訳語としての使用は“微傷”や“微睡”より遅いと思われるが、その詳細は今後調査する必要がある。ただ、現在では“微増”は今中英辞書にしか載っていないので「外語型」である。

3.3 以下では「中間型」について、即ち‘微飲’‘微義’‘微黃’‘微罪’を検討する。“微飲”は酒の事典に、“微義”は漢方医学に関する辞典に、“微黃”、“微罪”は《中文大辞典》(1966)に、それぞれ収録されていることから分かるように、「中間型」は辞書の性格によるところも大きく、中国の辞書編集者の立場や考え方の相違といったものを直接に反映するとは限らない。また、「中間型」の中で、“微罪”がいわゆる近代以降の日本語の影響を受けたようで、その変遷から日中語彙の交渉・交流の一端が垣間見えると思う。

3.3.1 ◆微飲 - 微飲

中国では“微飲”は常用されている。

○微飲一口, 味覚上的舒暢便能带动整体观上的快乐, 在瞬间得到升华。(rmw. 2005.5.31)

調査したところ、国語辞書にも中英辞書にも見当たらないが、下記の酒の事典に収録され、元(1271~1368)の用例が挙げられている。

中国酒事大典(2002) ○微飲 少量地飲。元佚名《折桂令・酒》曲词曰：“酒能消闷海愁山。酒到心头，春满人间。这酒痛饮忘形，微飲忘忧，好饮忘飧。”(p.476)

なお、日中の漢方医学で使う‘微飲’は日中両国ともかなり専門分野の用語として用いられている⁶⁾。

3.3.2 ◆微義 - 微义 — 《出关和雷侍郎送行无魔不成佛观过始知仁之句》宋·陈杰 ○事来思烂熟，罪去得深循。天壤嗟微义，风霜本至仁。(shici mingju)

中国語の“微义”は国語辞書には収録されていないが、達美君編《简明中医语词辞典》(2004)には収録され、典拠も挙げられている。

微义 谓精妙的意义。《伤寒真方歌括·太阳上篇方法》(清·陈念祖撰):“多饮煖水,使水精四布,上滋心肺,外达皮毛,溱溱汗出,表里之烦两除矣。白饮和服,即歎粥之微义也。”(p.306)

明の《本草綱目》を調べると、そこにも用例がある。

- …神曲丸，但云明目，百岁可读细书，而未发出药微义也，…（《本草纲目》<http://www.621m.cn/cms/>の電子版，p.380）

また、《漢語大詞典》（1986-1993）には見出し語として収録されていないものの、用例となる文が見られる。

- 清 黄宗羲《张景岳传》：“其所著《類經》，综覆百家，剖析微義，凡數十萬言，歷四十年而後成。”（卷9，p.912）

以上から分かるように、中国語の“微義”は宋や明や清などの文献に用例もあるが、国語辞書には収録されていない。《簡明中医语词辞典》に収録されている理由を考えると、恐らく明の医学書の《玉机微義》（1396）の書名を意識したからであろう。なお、‘微義’は日中両国で現在は使われていない状況にあるようである⁷⁾。

3.3.3 ◆微黄 - 微黄

“微黄”は“微红色”（前述の3.2）や“微红”（4.2.3で後述）とは違って《中文大辞典》（1966）に収録されている。晋の傅玄（217-278）による《鬪鷄賦》の“紅縹廁于微黄兮，翠彩蔚而流清”を典拠として挙げてあるが、前述の明の《本草綱目》の例から分かるように、“微+色を表す語”パターンは数多くあるのだから、“微黄”だけを収録するというのは恣意的と思われる。

一方、「微黄」が日本の文献に登場したのは『日国2』によれば江戸時代であるが、しかし、その用例（初出例）はなぜか「微黄色」となっている。

- *重訂本草綱目啓蒙〔1847〕一八・穀「胡麻（略）其子微黄色なるをあぶらごまと云」

なお、その例は『日国』の第1版にはないものである。

3.3.4 ◆微罪 - 微罪

“微罪”も中国で《中文大辞典》（1966）にだけ収録され、他の国語辞書には収録されていない。《孟子告子・下》の“乃孔子則欲以微罪行”を典拠に挙げているので、戦国時代（BC403-221）から用いられていることが分かる。そして、その後の文献を調べたところ、清の中期の書物に用例を採集することができるので、中国では用い続けられていると言える。

- …猛折氷柱敲珠宮蟻蝨臣微罪萬死（《拜經樓詩集》1802，卷11，p.2）

- 雖微罪不妄加人斯為執法也（《習是編》1824，下卷6，p.7）

また中英辞書への収録は、まずは清末の英華辞典、それから中英辞典にという順のようである。

- 英華字典(1868) ○a slight offence, 薄罪 微罪(p.1617)

- 華英字典集成(1887) ○a slight offence 微罪(p.340)

- 汉英法律分类词典(2004) ○微罪 petty criminality (p.334)

一方、日本の「微罪」について調べると、在華宣教師のロープシャイドによる《英華字典》にある“微罪”は『英華和訳字典』では前述の「微傷」と同じように、その箇所が略されている。しかし、井上哲次郎編『訂増英華辞典』（1884）では、ロープシャイドの《英華字典》の

「Slight」の箇所は中国語の発音を示すアルファベット以外は全くそのままになっているので、上記の《英華字典》の中の“微罪”の箇所も『訂増英華辞典』に継がれているのである。

訂増英華辞典 (1884) ○ a slight offence, 薄罪 微罪 (p.980)

また、文献や新聞には『訂増英華辞典』(1884)より早い用例がある。

○第九十六 明治六年四月十二日検事局ヨリ各裁判所出張検事局へ達

檻倉ノ囚初席ノ推問モ経サル者又極メテ微罪ニテ一時拘留スル者ニ限り候筈ニ付其他

ハ一切檻獄へ送付可致事 (『第二憲法類編・第二十冊』1874, p.1)

○微罪の裁判にして検事の上告に係り… (ash. 大阪朝刊1879.3.4, p.1)

ただ、次の1876年3月15日の『読売新聞』では、上記の『朝日新聞』と異なり、「微罪」に「かるいつみ」と振り仮名が付けてある。

○(官令)乙第廿六號 府縣 罪犯糾問中及囚徒ノ内微罪ノ者ニシテ或ハ老幼癡疾ノ類
都テ各廳ノ都合ニ依リ用宿其他親族隣保ニ責付スル者 賄料ノ儀ハ本年七月ヨリ左ノ
費額ヲ頂度トシ各地ノ實際ニ就キ精々節減致シ… (ymur. 朝刊1876.3.15, p.1)

「かるいつみ」と読んだのだが、明治期の山田美妙編『大辞典』(1912)と、大正期の『日国』の前身である『大日本國語辭典』には「びざい 微罪」として収録されている。

大日本國語辭典 (1915-1919) ○びざい {微罪 (名) 微細なる罪状。極めてすこしのつみ。小罪。 びざい ふけんきょ {微罪不檢舉【法】微罪は寛假して法律に問はざること。(p.446)

そして『日国』第1版では上記の語釈を「小さな罪。きわめてわずかな罪」と書き換え、典拠と用例を増補して第2版に至るが、その用例(1910)は上記で挙げたものよりかなり遅い。

須々木圭一(1965)の「起訴猶予の目的と保護観察(一)」⁸⁾によると、日本では明治期に、刑事訴訟法において「微罪」への対処について色々工夫をされていた。総務省行政管理局のe-Gov(イーガブ)によると、現在の「犯罪捜査規範」⁹⁾第百九十八条などが「微罪処分」に関する基準となっている。

(微罪処分ができる場合)第百九十八条 捜査した事件について、犯罪事実が極めて軽微であり、かつ、検察官から送致の手続をとる必要がないとあらかじめ指定されたものについては、送致しないことができる。…

このように、日本では明治初期から「微罪」が法律用語として使われている。

それに対して、中国では刑事訴訟法や刑法などの法的条文には“微罪”が使われていない。したがって、日本の「微罪」は中国のそれと異なり、従来、法律用語という性格をもっていると言えよう。

ただ、《人民网》における“微罪”の使用状況を調査してみると、2002年～2006年の1～2例(重複の記事は省く)から、2007年～2009年の5～7例、2010年の12例へと増加してきたが、2011年には21例にまで急増し、2012年の現時点(7月)ではすでに21例となっている。

- 因其犯罪情节轻微，且已基本挽回损失，28日下午，省人民检察院海南分院在澄迈公开对其作出微罪不起诉决定。(rmw. 2002.8.29)

この状況では、“微罪不起诉”の件数の増加につれ、近い将来“微罪”は国語辞書に収録されるであろう。“微罪不起诉”は日本語の「微罪不起诉」の借用語と思われるが（詳細は調査中）、“微罪”自体は中国語である。しかし、最近の“微罪”の使用は日本語の影響によるところが大きいとも考えられよう。

3.4 以上、中英辞書にしか収録されていない「外語型」と、「国語型」と「外語型」の間に属する「中間型」について検討を加えたが、要するに「外語型」は、日本では近代の西洋文化の導入により、訳語や新語として間もなく日本の辞書類に収録されるようになったのに対し、中国では一般的には「語」（“词”）としてより「句」（“短语”）として認識されており、国語辞書には収録されていないが、専門分野においては訳語として、つまり学術用語として取り扱われるにつれ、中英辞書や専門用語辞典には収録されるようになった。

また、注目すべきは、日本では昭和期に中国語から「微増」（微減も含む）が借用されたことと、中国では近代以降日本で盛んに使用されている「微震」「微罪」に影響を受けたことではないかと思われる。

4 中国で出版された辞書に収録されていない、清末以前の文献に例証があるもの

4.1 さて、上述のように、中国で出版された辞書に収録されていない、清末以前の文献に例証があるもの（表1のI A-b）、つまり「未収型」は15語ある。

以下、例証を挙げるが、収録されない要因も検討するため、その15語を、(i) 廃用の傾向にあるもの、(ii) 「語」（“词”）より「句」（“短语”）として認識されるものに区分する。

- (i) : 微勲^{*}-微勋^{*} 微細行天^{*}-微细行天^{*} 微心^{*}-微心^{*} 微忠^{*}-微忠^{*}
 (ii) : 微運^{*}-微运^{*} 微芸^{*}-微艺^{*} 微見^{*}-微见^{*} 微減^{*}-微减^{*} 微紅^{*}-微红^{*} 微臭^{*}-微臭^{*}
 微進^{*}-微进^{*} 微善^{*}-微善^{*} 微促^{*}-微促^{*} 微虫^{*}-微虫^{*} 微服潜行^{*}-微服潜行^{*}

4.2.1 (i) 類には謙讓表現に用いられるものが多い。敬語表現が廃れてきた近現代の中国において、“微勲”、“微心”、“微忠”は国語辞書に収録されることがないままである。また、“微細行天”は仏教の宇宙観による「三十三天」の一つで、特殊な用語なので常用されなかったか、あるいは仏教が廃れたことにより死語になったため収録されなかったかであろう。

(i) 類の例証は以下の通りである。

◆微勲^{*}-微勋^{*} — 《次韵范纯仁和郭昌朝寺丞见寄二首》宋·宋庠 ○言路再居无少补，护边三岁乏微勋。(shici mingju)

◆微心^{*}-微心^{*} — 《晋书·石勒载记上》 ○勒奉戴明公，如天地父母，明公当察勒微心，慈眇如子也。(hdgj)

◆**微細行天**-**微細行天** (『日国』と同様:「正法念經 - 二五」)

◆**微忠**-**微忠** — 《夜观秦蜀地图》宋・陆游 ○正令选壮不为用, 笔墨尚可输微忠。(shici mingju)

4.2.2 (ii) 類は (i) 類の古典的な言葉と異なり、古典の書物の用例のみならず最近の使用例も見られる。例えば、“**微見**”、“**微減**”、“**微紅**”、“**微臭**”、“**微進**”などは常用される。また、“**微善**”は仏教用語に由来するが、近年“**微博**(ミニブログ、中国版Twitter)”と“**微**”の付く語句の流行のため、広く使われるようになった。そして、“**微促**”は、管見では例証が医学書《**广瘟疫论**》(1675)に遡れ、現在では漢方医学や漢方薬方面のウェブ・サイトなどで使われているようである。さらに“**微服潜行**”については、成語辞典には“**微服私行**”が収録されており、“**微服潜行**”より常用されていると言えるかもしれない。なお、“**微芸**”、“**微运**”、“**微虫**”は廃れたため、あるいは使用頻度が低いため収録されなかったのではないかと思うが、ただ“**微虫**”は、近代日中語彙の交渉・交流の跡が見られるので、次節で詳しく検討したい。

以下、文献例証や用例などを挙げるが、常用されているものは省略する。なお、日本語の「**微減**」が‘**微増**’と関連するので、初出例と思われるものを挙げておく。

◆**微運**-**微运** — 《周書・卷四十 列傳第三十二》○是日微运, 宮中已不守矣。(hdgj)

◆**微芸**-**微艺** — 《新唐書・列傳第一百四 李郑二王贾舒》○诗賦微艺, 断离经传, 非所以观人文化成也。(hdgj)

洋漢合字彙(1831)○HABILIDADAES 小技。**微藝**。(p.417)

○“八十书怀”…去国习**微艺**, 归来思展添。… (胡宁, 1996.2《现代物理知识》1998.3, p.41)

◆**微見**¹⁰⁾-**微见** — 《汉书・王莽传上》○莽色厉而言方, 欲有所为, 微见风采, 党与承其指意而显奏之, (hdgj)

○各埠金融及商況: 運城(十月六日通信): 近日本處自秋節後, 市面**微見**起色…(《銀行週報》21, 1917.1, p.9)

◆**微減**-**微减** — 《戏作野兴》宋・陆游 ○今年病**微减**, 耕稼乐江村。(shici mingju)

* (日本) ○「九月生産**微減**」(ymur. 夕刊1935.10.9, 4P)

◆**微紅**-**微红** — 《自咏》唐・白居易 ○须白面**微红**, 醺醺半醉中。(shici mingju)

◆**微臭**-**微臭** — 《本草綱目》(明・李时珍1518-1593) ○原野甚多。方茎对节, 与大叶香薷一样。但香薷搓之气香, 而爵床搓之不香**微臭**, 以此为别。

(<http://www.621m.cn/cms/> の電子版, p.564)

◆**微進**-**微进** — 《吴越春秋・夫差内传・十四年》漢・赵晔 ○夫螳螂翕心而進, 志在有利, 不知黄雀盈綠林, 徘徊枝陰, (蹶蹶)(蹶蹶)**微進**, 欲啄螳螂。(《二十五别史》劉曉東等校點, 齊魯書社2000, p.48)

○在全球经济一体化的今天, 上汽“**微进则退**”的教训太深刻了。(rmw. 2005.8.12)

◆^{*}微善-微善—《法苑珠林・卷七十三》(668) ○是诸畜生有微善根。是故杀者。具受罪报。(hdhj)

○由于通过网络支付,捐款非常方便,捐款人可以任意选择金额数字,一元不少,一万不多,这就是网站提倡的“微善”概念。(rmw. 2012.1.13)

◆^{*}微促-微促—《广瘟疫论》(清・戴天章, 1675)[卷之一/辨传经・夹脾虚]○…如面色萎黄,神情倦怠,气息微促,及心悸、耳鸣皆脾虚中气不振之象,更须通体合参。

(<http://www.621m.cn/cms/> の電子版 p.10)

○“1. 人参 附子”…【临床应用】1. 治疗休克及厥脱证…出现神志淡漠或烦躁不安、面色苍白或潮红或紫绀、四肢厥冷、汗出不止,气息微促或与气促息微等症…(《对药的化学、药理与临床》2002, pp.462-492)

○青春靓丽的小璐天天都会打扮得时尚养眼,扭动身子用微促但动听的声音向观众传达着明日气象信息。(rmw. 2003.6.26)

◆^{*}微虫-微虫—晋潘岳《萤火赋》:“羨微蟲之琦璋,援彩筆以爲銘。”(《漢語大詞典》卷4, p.591)

◆^{*}微服潜行-微服潜行—《南齐书・卷四十八》(萧子显489-537)○宋明帝投顛尸江中,不听敛葬。象与旧奴一人,微服潜行求尸,四十余日乃得, …(hdgj)

○据说此次随行连主席“登陆”参加两岸经贸论坛的170人代表团中,有些工商界人士是微服潜行的, …(rmw. 2006.4.18)

4.2.3 以下、“微虫”について検討する。その文献例証は上記の晋の詩歌に求められ、「小さな虫」を意味する。辞書に収録されていないのは、使用頻度が低いからだと思われる。

○著名画家潘絜兹的《春蚕颂》写道:“春蚕化生, 蠶而微虫, 春蚕何取, 一桑始终, 春蚕春蚕, 万世可风”, 他对春蚕的品质进行了高度赞美。(rmw. 2004.9.8)

一方、『日国2』では、「小さな虫」と「微生物」の語積が挙げられる。「微生物」には用例として「*造化妙々奇談 [1879~80] <宮崎柳条>「牛乳餅の(かび)壊(くさ)る時、中に微虫(ビチウ<注>コムシ)を生ず。目力の能く及ぶ所にあらず」が示されている。そこで、中国語でも「小さな虫」以外に「微生物」の意味で使われていたかどうかという疑問が生じる。

沈(1999)によれば、在華宣教師のアレキサンダー・ワイリー(Alexander Wylie・偉烈亜力)編《六合叢談》に“微虫”が4例使われているという。検討してみると、ウィリアムソン(Alexander William, 韋廉臣)が第1巻7号(1857.6)に投稿した“眞道實證 上帝無不在”という宣教のための文章で“微虫”が使われており、そのいずれもが下記の通り「微生物」を意味していることが明らかになった。また、『日国2』の上記の用例の典拠はその中の一文の日本語訳でもあったということも明らかになった。

○牛奶餅霉壞時、中生微虫、非目力所能及、(7-5a-4)

○氣中有微虫、隨呼吸出入鼻中、而人不覺焉、身體中有微虫、遊行食息于肌骨臟腑間、

而人不覺焉、一切物中皆有微虫(7-5a-9~10)

また、1897年にマカオで創刊された《知新報》¹¹⁾からも“微虫”の用例を採用することができる。下記の“微蟲致病”と題とする文章には、“微虫”、“微生物”、“微細(之)生物”、“惡微生物”、それに音訳語の“璧他利亞(バクテリア)”が言い回しのように使われている。

微蟲致病

…直至後世顯微鏡之精、始能考知酒醉之微生物雖小、而非極微、…(中略)至一千七百七十三年、有母罇者、試將濁水內之微生物分為類、凡此微細之生物、總名為璧他利亞、至一千八百五十七年、爹委午…(中略)又表明璧他利亞、乃致病之由、…(中略)自考知呼吸惡微生物之險、不可不留心謹慎、設法殺滅居處間之微生物、或阻止其發出之地、此誠衛生之要旨也。(《知新報》36, 1897, pp. 23-24)

《近现代汉语新词语词源词典》などによれば、“微生物”という新語は最初1892年の《格致彙編》に記載されたことになっている。つまり、最初、在華宣教師による洋学資料では中国語固有の“^{*}微虫”を微生物に充てたが、上記の“微蟲致病”(1897)と題する記事が示すように、“^{*}微虫”は中国でしばらく新語の“微生物”と同義語のように使われていたようである。しかし、その後“微生物”の定着により、“^{*}微虫”の派生義(引申義)も自然に消滅したのであろう。この事実は『日国2』の「微虫」に「微生物」の語積があることに対応し、当時日中語彙の交渉・交流が密接であったことを裏付ける証であると思われる。

4.3 中国で出版された辞書に収録されていない、清末以前の文献に例証があるもの(「未収型」)に関する報告は以上の通りである。「未収型」の辞書に収録されない原因については以上の通り、(i)類は“^{*}微勛”、“^{*}微心”、“^{*}微忠”などの謙讓表現が多く、近現代の中国において敬語表現が廃れる傾向にあるからであると考えられる。(ii)類の“^{*}微見”、“^{*}微減”、“^{*}微紅”、“^{*}微臭”、“^{*}微進”、“^{*}微善”などは使用頻度は別として現在でも使用されているのである。使われていながら、辞書に収録されないのは、その多くは「句」(“短语”)として認識されているからと言えよう。但し、“^{*}微运”は廃れたことがその要因であり、“^{*}微艺”、“^{*}微促”、“^{*}微服潜行”、“^{*}微虫”などは使用頻度が低いことがその要因の一つとなっていると言えよう。

「未収型」の辞書に収録されない原因は上述の通り多種多様であるが、ここで注目すべきは、3章節で述べたことと関連しているが、中国における辞書収録の見出し語の選定は、日本と大きく異なる点である。漢語は、日本語に借用される際、中国語で「句」(“短语”)であるかどうかは問題とならない。そして辞書編集の際にも、日本の文献に残っている漢語をなるべく収録しようとする傾向があるので、日中同形語の一部が実際中国の国語辞書に収録されていないという現象が起きるのである。

5 むすび

‘微’の133語の日中同形語のうち、中国で出版された辞書に収録され、清末以前の文献に例証があるもの(表1のI A-a)と中国で出版された辞書に収録されていない、清末以前の文献に例証があるもの(表1のI A-b)について検討してきたが、今回の調査と考察を通じて、日中両国の辞書編集の相違と現状の一端が明らかになった。しかし、より詳しい調査が必要であるものや問題点もあるので、今後、本稿で検討していない日中同形語の調査・考察と共に取り組んでいきたい。

なお、日本で出版された中日辞書も参考にしたが、本論の主旨のために言及しなかった。但し、“微罪”は『日中辞典 新語・情報編』(2005、小学館)、“微伤”、“微红”、“微见”は『中国大辞典』(1994、角川書店)に収録されていることを明記しておく。

注

- 1) 例えば民国期の《四海》という刊行物に“船用微粉炭焚机之效能:附表”と題された記事が載っている(1931.2.9号, pp.21-26)。
- 2) 《漢語大詞典》には「【家微】家庭出身微贱。宋周密《齐东野语·杨太后》:“〔楊太后〕既貴,耻其家微,陰有所遺,而絶不與通,密遣内璫求同宗,遂得右庠生嚴陵楊次山為姪。”(卷3, p.1477)」とある。
- 3) 『日国2』では「微粒子病原体」は「ろかせいびょうげんたい(濾過性病原体)」に同じと説明されているが、中国では「濾過性病原体」が使われている。(《人民网》の用例:“负责这项研究的新加坡国立大学医院过滤性病原体学专家朱利安·唐指出,通过研究发现,这三者均能传播流感病毒,…” 2011.1.28)
- 4) 「微事郎」を収録する辞書については、『日国』の前身である、上田万年・松井簡治編『大日本國語辭典』(1915-1919)に遡れ、『日国』の語釈「(正八位下の唐名。*拾芥抄〔13~14C〕中・官位唐名部「正八位下く微事郎)」も第1版から『大日本國語辭典』のままとっている。
- 5) 震度階級に関しては、1898年に「微震(感ナシ)」、「弱震(弱キ方)」、「強震(弱キ方)」が追加されて7階級となり、そして1936年に「無感、微震、軽震、弱震、中震、強震、烈震」と改称されたが、1996年にそれらの名称はすべて廃止されたという。
- 6) 《金匱要略》には“夫短氣有微飲。當從小便去之。苓桂朮甘湯主之。”の一節がある。今倉章の「今倉病院」ウェブ・サイト(<http://www.ne.jp/asahi/akira/imakura/index.html>)によれば、その意味は「夫れ、短氣して微飲有るは、當に小便從り之を去る。苓桂朮甘湯之を主る。」となっている。
- 7) 既存語かどうかについては、本論では主旨により特に問題視しない。
- 8) 『早稲田法学』40巻第2号(1965.3.20, pp.169-203.)
- 9) 「昭和三十二年七月十一日国家公安委員会規則第二号。最終改正年月日:平成二四年六月二一日国家公安委員会規則第八号」とある。
- 10) 1912年9月23日の『朝日新聞 朝刊』(東京)には「形跡も微見えた」(p.5)というのが見られる。今後「微見」との関係を検討する必要がある。
- 11) 《知新報》とは、当時康有爲、梁啓超などの維新派の主幹によって発行された刊行物である。

参考(引用)文献

- 李時珍(1590).《本草綱目》<http://www.621m.cn/cms/>の電子版
吳騫(清嘉慶壬戌本,1802).《拜經樓詩集》
王昶(清嘉慶戊辰,1808).《春融堂雜記八種》塾南書舍藏版
屈成霖(清道光四年本,1824).《習是編》
Joaquim Gonçalves(ゴンサルベス,江沙維)編(1831).《洋漢合字彙(葡中辭典)》MACAO
W.Lobscheid(ローブシャイド,羅存德)(1866-1869).《英華字典》香港:DAILY PRESS
明法寮編(1874).『第二憲法類編第二十冊』村上勘兵衛ほか
関徳(1877).『西南戦争記事』中川勘助ほか
鄭其照(1887).《華英字典集成》上海:Wah Cheung
津田仙ほか(1879).《英華和訳字典》東京:大空社1998(近代英華・華英辭書集成1-6)
井上哲次郎(1884).『訂増英華辭典』ゆまに書房1995(近代日本英學資料8)
高橋五郎(1888).『漢英対照いろは辭典』東京:大空社1997(明治期国語辭書大系:普2)
高橋五郎(1888~89).『和漢雅俗いろは辭典』東京:大空社1998(明治期国語辭書大系:普4)
山田美妙(1892-1893).日本大辭典(1892-1893)東京:大空社1998(明治期国語辭書大系:普6)
藤井乙男・草野清民編(1896).『帝国大辭典』三省堂
落合直文(1898-1999).『ことばの泉』大倉書店
郁文舎編輯所(1904).『理科辭典』東京:郁文舎
山田美妙(1912).『大辭典』高山堂
詹天佑(1915).《新編華英工學字彙》中華工程師會出版 上海:上海商務印書館
王應偉(1917).“地震之震度及震源距離(附圖)”《觀象叢報》10,1917.2,pp.39-52
松井簡治・上田萬年(1915-1919).『大日本國語辭典』東京:富山房
張鵬雲(1920).《漢英大辭典》商務印書館
舒新城主編(1936).《辭海》北京:出版(1981,再版)
陳望道主編(1965).《辭海》中華書局香港分局
李侍徳主編(1956).《最新漢英大辭典》中国図書出版公司
鄭易里編(1957).《英華大辭典》(修訂縮印本)時代出版社
長嶋大典(1970).『新版 蘭和・英和辭書發達史新版』ゆまに書房1996(書誌書目シリーズ42)
北京外国語學院《中英辭典》編集委員會編(1979).《中英辭典》香港:商務印書館
辭海編輯委員會(1979)(1989)(1999)(2009).《辭海》上海:上海辭書出版社
劉正琰ほか(1984).《漢語外來詞詞典》上海:上海辭書出版社
羅竹風主編(1986-1993).《漢語大詞典》漢語大詞典出版社
高名凱・劉正琰著・鳥井克之訳(1988).『現代中国語における外來語研究』関西大学出版部
戴鳴鐘・戴煒棟主編(1991).《漢英綜合辭典》(1991)上海:上海外語教育出版
呂宗力主編(1994).《中国歴代官制大辭典》北京:北京出版社
中国社会科学院語言研究所詞典編輯室(1995)(1996)(2002)(2005)(2012).《現代漢語詞典》北京:
商務印書館
沈国威(1995).『「新爾雅」とその語彙』東京:白帝社
荒川清秀(1997).『近代日中学術用語の形成と伝播』東京:白帝社
馬西尼著・黄河清訳(1997).《現代漢語詞匯的形成》漢語大詞典出版社
吳光華主編(1999).《漢英大辭典》(第二版)上海:上海交通大學出版社
沈国威(1999).『「六合叢談」(1857-58)の学際的研究—付・語彙索引/影印本文』東京:白帝社
天津市地方志編修委員會(1999).《天津通志・旧志点校卷上》天津:南开大學出版社
香港中国語文学會(2001).《近現代漢語新詞源詞典》漢語大詞典出版社
孔大陸主編(2002).《英漢双向醫學詞典》上海:上海交通大學出版社

- 徐海荣主編 (2002).《中国酒事大典》华夏出版社.
- 陈彤 (2002).《英漢双向商貿詞典》上海：上海交通大学出版社
- 苗明三ほか (2002).《对藥的化学、藥理與臨床》軍事医学科学出版社
- 白永権主編 (2003).《新漢英医学辞典》河南：河南科学技術出版社
- 苑春鳴主編 (2004).《汉英法律分类詞典》河南：河南科学技術出版社.
- 高野繁男 (2004).『近代漢語の研究——日本語の造語法・訳語法——』東京：明治書院
- 達美君主編 (2004).《簡明中医語詞辞典》上海：上海科学技術出版社.
- 沈国威 (2008).『漢字文化圈諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』関西大学出版部
- 阮智富ほか (2009).《現代漢語大詞典》(上下)上海：上海辞書出版社
- 朱鳳 (2009).『モリソンの「英華・英華字典」と東西文化交流』東京：白帝社
- 沈国威 (2010).『近代中日詞彙交流研究——漢字新詞的創制、容受與共享』中華書局
- 宮田和子 (2010).『英華辞典の総合的研究——19世紀を中心として』東京：白帝社